

## タイトル

転勤者さんいらっしゃい 平成竹林の七賢 オトナの隠れ家へようこそ

## 応募者

宮本 久美子さん（東京都、派遣社員）

## アイデアについて

### ① アイデアのタイトル

転勤者さんいらっしゃい 平成竹林の七賢 オトナの隠れ家へようこそ

### ②アイデアの概要（目的・方法・効果などを、200字以内でお書き下さい。）

都会=おしゃれ、地方=つまらないというイメージを払拭するために、お寺にオトナの隠れ家をつくる。そのためには転勤や引越をしてきた、いわゆる「よそ者」たちも積極的に誘い、彼らにも意見を出してもらおう。彼らが友人を呼びやすい環境を整え、人の流れをつくる。お寺は都会の政争に疲れた人々の心を癒し、心のふるさとを求めて多くの人々が集うようになる。人が集まればそこからまた新しい何かが生まれるであろう。

### ③アイデアの内容（できるだけ具体的にお願い致します。）

添付参照



## 転勤者さんいらっしゃい 平成竹林の七賢 オトナの隠れ家へようこそ

そもそも、なぜ過疎、過密という現象が起きるのだろうか？

日本では、都会がオシャレで、地方に転勤になることが左遷や一線を退くようなイメージにとらえられることが多い。一方、過疎化の進みの早い地方というのは閉鎖性や排他性を持っているのかもしれない。



そういったイメージを払拭するためにオトナの隠れ家的な風流な空間をつかって、“新しく転勤、引越してきた人”を招く。彼らにも隠れ家づくりを手伝ってもらおう。誰しも子供の頃、一度は秘密基地や隠れ家に憧れたことがあるはず。

「でも、オトナの隠れ家的な風流な空間って何だか難しそう」  
→そんなことは、ありません。

お寺は、もともとある建物や庭だけでも十分、風情があります。そこに、ほんの少しモダンな要素を取り入れるだけでオトナの隠れ家に変身します。

アロマ  
キャンドル  
を灯す

こだわりの  
珈琲とスイーツ  
を出す

庭を季節の花で  
いっぱいにする

今は何でもネットで手に入る時代。新しき良きものは取り入れる。それらを楽しむ場所を提供する。お寺なら公民館などとはまた違った風情がある。

そして、イベントを開いたり泊まれるようにしたりする。

「そのアイデアって、今までにも提案されたことあるような気がするんだけど」  
→1つ1つのパーツはそうかもしれません。

このプランのポイントは  
“誰を主体にし、誰に来てもらうのか”  
ということなのです。



転勤や引越をしてきた、いわゆる”よそ者”たちにも積極的に働きかける。

1.チラシ、ポスターなどを配る:地元企業に参加者を募る。  
“転勤してきたばかりの人”にも声をかけてもらう。

とある銀行

支店長「堺君、君はまだこちらに転勤してきたばかりだったね。今度、お寺でイベントがあるんだが、行ってきたらどうかね？」

堺(お寺なんてここより更に田舎じゃないか。。仕方ない、支店長命令だ。預金者様もいらっしゃることだし、仕事だと思って行ってくるか)

=チラシをみる=

堺(ん? 案外おもしろそうだな)

2. イベントを開く：観月会など昔ながらの自然を楽しむようなものが逆に新鮮かもしれない。  
最近ではブログを書いている人も多い。  
“新しく参加した人”にも、いろいろアイデアを出してもらおう。

### 観月会

妻「きれい。田舎暮らしも悪くないね」

堺「ああ、こんなところにこんな場所があったとは、世の中にはまだまだ俺の知らないことがたくさんあるんだな。ここに来てよかったよ」

3. 懇親会など参加者同士が知り合いになれる機会を設ける。

イベントには地域の人と、転勤や引越をしてきてもともと地元の人ではない人の両方に参加してもらおう。もちろん一人参加もOKだ。  
いきなり仲良くなるのは難しいが、何回も顔を合わせているうちに打ち解けてくる。  
お坊さんならみんなの仲を取り持てるのではないだろうか？

4.泊まれる施設をつくる:転勤者に昔の同僚、友人に遊びにきてもらうようにすすめる。  
季節の花や食材があれば誘いは、より魅力的なものになる。

堺「こんないいところがあるのなら、あいつらも呼んでやりたいな」

寺の静けさは都会の政争に疲れた人々の心を癒やすであろう。  
都会に戻った後もまた訪れたいくなる心のふるさとなる。  
そこから心豊かな新たな指導者が生まれるかもしれない。

堺「及川、近藤、久しぶり!」

及川「あれ、思ったより元気そうじゃないか。転勤になってもっと落ち込んでるかと思ったのに」

堺「ああ、最初は落ち込んでたんだけどな。このお寺と地元の人たちが俺に元気をくれたんだ。いろいろ話をきかせてくれ」

近藤「確かにいいところだな。今夜は朝まで語り明かすか」

## まとめ

「心のふるさと」

悩み傷ついた人々が自分を取り戻す場所、お寺。

今、一番、お寺を必要としているのは都会の人たちなのかもしれない。

都会と地方をつなぐ架け橋、お寺。

オトナの隠れ家、お寺。

彼らはきっと忘れないだろう、元気をもらったことを。

いつかきっとまた訪れる。大切な家族や友人をつれて。

オトナの隠れ家はみんなの宝物になる。

人々がたくさん訪れるようになれば、お寺も元気になるであろう。

